

次の文章を読んで思うところを六〇〇字以上八〇〇字以内で述べなさい。

〔教学社注・解答用紙には題目を書く欄が設けられている。〕

作用する、ということについてよく考える。電車で、見知らぬひとの隣に座る。そのとき必ず、自分が隣のひとの運命を変えてしまうのではないかとひどく緊張する。たとえば、隣のひとは大事な試験を控えていて、実力的には余裕で合格なのだが、わたしが隣に座ったことによつて空気の流れが変わってしまった、ウィルスが入り込み、試験日当日病気になってしまう。もしくは、考え事をしていたにもかかわらず、わたしが隣に座ることでも集中力が一瞬途切れ、何かイノベーティブなアイデアが失われてしまう。

「風が吹けば桶屋が儲かる」という言葉がある。この世界は、思わぬ作用に充ち満ちている。小さな意図せぬ挙動が、大きな出来事を引き起こしたり、反対に歴史的な事件が、すぐに忘れてしまうようなささやかな出来事につながったりもする。

さつきまで飲んでいた缶コーヒーを捨てるために、少しだけ遠回りして歩くとき。修正テープを買うために、文房具屋に立ち寄るとき。ストロベリー味ではなく、ブルーベリー味のヨーグルトを買うとき。「へえ、そうなんだ。」と友だちに言うとき。

ブラジルの一匹の蝶の羽ばたきが、テキサスの竜巻を引き起こすように、わたしの何気ない行為が、隣の誰かだけでなく、世界全体にまで影響を及ぼしていく。その途方もなさに、ときどき頭がぼうつとする。

わたしたちは無力で、無力ではない。わたしが外出するだけで、指を鳴らすだけで、電気を点けるだけで、世界は変容してしまう。そんなことを想像する。

わたしたちが生きる社会では、毎日のように悲惨な事件が起こる。

コメンテーターやネットのコメント欄には、犯人を憎悪する言葉が並べられる。犯人を厳しく罰して欲しい、絶対にゆるしてはいけない、このひとは異常者だ、と憤りがあふれる。わたしはその言葉に時にうなずきながらも、どこかでやましさを感ずる。

実行犯が億人組でそのうちのひとりが僕である可能性／岡野大嗣

犯人の顔写真が映し出されるたびに、わたしはこの短歌を思い出す。わたしが、何かしらの形で動因のひとつになっていたとしたら。実行犯と、知らないうちに静かな連帯を育んでいたとしたら。わたしたち全員が、共犯者だとしたら。望むと望まないにかかわらず、わたしとあなたは互いの音を響かせあっている。そんなことを考えてまた、頭がぼうつとする。

だが、幸せな想像をすることもできる。

わたしの小さな行為がさざ波を生み、デンマークの青年に幸福が訪れる。ブラジルの老人にうれしいことがある。もつと言え、わたしが文章を書いて、どこかの誰かの世界が少し変わる。そんなことだつてあり得なくはない。

作用とは不思議なものだ。連関とは不思議だ。わたしたちはみなひどく個別的で、孤独でありながら、信じられないほど濃密に関係している。